

＜集団活動における対人ストレスイベントと 集団活動志向性の概念形成に向けた研究＞

研究年度 令和6年度

研究期間 令和6年度

研究代表者名 永峯卓哉

共同研究者名 吉田恵理子、坂本仁美

はじめに

大学教育改革の旗印のもと、多くの大学では、アクティブラーニングに代表される、学生中心の双方向型授業や学生が能動的に活動する学生参加型授業を取り入れている。大学で実施するアクティブラーニングの最終的な目的は、大学での専門的な認知的側面の学びだけではなく、将来的に、社会人として積極的に協働しながら課題解決できる人材の育成にある。本研究の問いを解決することで、その目的達成に大きく前進すると考えている。

アクティブラーニングの効果を左右するのは、集団活動への学生の積極的で主体的な参加と、活動内での学生同士の生産的なやり取りである。そのような集団活動が行われるために、活動内での個人的要因による対人的力動性をどのように整え、活用すればよいのかということが、本研究の学術的問いである。

対人ストレスについて橋本（2005）¹⁾は、送り手の意図も受け手の評価もネガティブである対人関係と称している。さらに橋本（1997）²⁾は青年期の対人関係の中でストレスとなる出来事として、対人ストレスイベントについて分類している。対人ストレスは、対人葛藤、対人劣等、対人摩耗の3種類からなり、それらはソーシャルスキルと関連している。対人葛藤は他者の行動に起因した、社会の規範からは望ましくない顕在的な対人葛藤に関するものであり、対人劣等は、主体側に起因する劣等感を触発する事態やスキルの欠如に関するものである。対人摩耗とは、日常的によく起こる社会的規範からはさほど逸脱していない配慮や気疲れをとまなう対人関係がストレスとなっている事態のことである。橋本の対人ストレスは大学生の日常生活で起こる出来事を分類しているが、今回は集団活動中で生じている対人ストレスイベントについて検討する。

大学生の日常生活では対人関係を避けて生活することもできる。特にコロナ禍では、対面での接触を極力避けるような生活を強いられており、ここ数年間は対人ストレスも減少したのではないかと推察できる。しかし、授業内で実施される集団活動は必ず参加する必要がある、避けられない状況が存在している。そのような集団活動で生じる対人ストレスイベントには、日常生活での対人ストレスとは異なった様相が予想され、これまで調査した研究報告はない。コロナ禍を経て、主体側の要因も環境側の要因も何らかの変化が生じ

ている可能性もあり、これらについても検討する必要がある。

そこで本研究の目的は、将来社会人として積極的に協働しながら課題解決できる人材の育成を目指したアクティブラーニング実現のために、大学生における集団活動での対人ストレスイベント、および集団活動に対する志向性について検討し、測定尺度を検討する。あわせて、集団活動の効果に影響する個人的要因を検討するため、集団活動対人ストレスイベントと関連する諸変数を用い、集団活動対人ストレスイベントおよび集団活動志向性の概念を検討することである。

研究方法

1. 調査対象

2023 年度および 2024 年度に在籍する A 大学看護学科学生とした。

2. 調査方法

学年ごとに講義終了後、講義室に残ってもらい、研究の趣旨・目的等を説明したのち無記名自記式調査票を配布した。同意が得られた場合のみ調査票に回答し、一定期間内に提出してもらった。

3. 調査内容

1) 基本情報

学年等について設定した。

2) グループワーク（GW）好き嫌い

「GW が好きか嫌いか」について「1：全く好きではない」から「4：とても好き」の4件法で調査した。

3) GW 対人ストレス内容

橋本¹⁾の対人ストレスイベント尺度と久田他²⁾のストレッサー尺度を参考に、特に集団活動で感じる対人ストレスイベントについて検討し、GW において体験する対人ストレス項目を 30 項目選定した。回答は「1：よく起こった」から「4：起こらなかった」の4件法とした。

4) 集団活動志向性尺度

独自に作成した、集団活動に対する志向性について、22 項目を設定した。項目に対して、「1：まったくそう思わない」から「5：非常にそう思う」までの5件法とした。

5) 個人特性

協同作業認識、性格特性（ビッグファイブ）、一般感情尺度（3 因子 24 項目 4 件法、点数高値でその感情を強く感じる）、自尊感情（10 項目 5 件法、合計点高値で自尊感情が高い）等について調査した。

4. 分析方法

GW 好き嫌いについては、「GW が好きか嫌いか」の「1：全く好きではない」から「4：とても好き」の回答を1点から4点で点数化し、点数が高いほどGWが好きとなるようにした。また、回答の「1・2」を嫌い、「3・4」を好きと2群に再分類した。

GW 対人ストレス項目については、「1：よく起こった」から「4：起こらなかった」の回答を1点から4点で点数化し、点数が低いほど対人ストレスがよく起こっているようにした。

集団活動志向性については、「1：まったくそう思わない」から「5：非常にそう思う」の回答を1点から5点で点数化し、点数が高いほど集団活動に対してそのような意識が高いと判断する。

点数化した調査項目について、基本統計量を算出するとともに、項目間の関連性を検討した。2変量の相関については、Pearson の積率相関係数を用いた。

統計的分析は、IBM SPSS ver. 29.0 for Windows を用い、有意確率5%とした。

5. 倫理的配慮

調査対象者には、研究目的・方法、協力の任意性、研究協力に伴う負担並びに予測されるリスク・利益、個人情報の取り扱い、研究参加は任意であり、参加・不参加による一切の不利益を被らないこと、とくに成績とはまったく関係しないこと、研究成果の公表について口頭及び文書で説明した。

また、研究終了後、研究資料は施錠できる書庫に5年間保管後、紙面および分析結果はシュレッダーで破棄することを説明した。

本調査は、無記名で行うが、経年変化分析のため、学籍番号の記載を求めたが分析の段階でリナンバーリングを行い、個人が特定されないように配慮した。

A 大学一般研究倫理委員会の承認（承認番号 358）を得た。

結果

1. 調査票の基本統計量（表1）

調査対象となった学生は、1年次生から4年次生の474人であった。

任意の体験したGWで感じたGW対人ストレス内容4因子についての平均（SD）点では、「配慮過多による疲労」3.71（0.42）点、「非難攻撃」3.90（0.21）点、「不信劣等」3.53（0.55）点、「気掛かり」3.20（0.89）点であり、30項目中因子分析による削除項目を除いた27項目の平均は3.70（0.35）点であった。また、項目中の「GWの時間がとても苦痛だったと感じた」では、3.73（0.55）点であった。この項目は、GW対人ストレス内容の因子と相関が高い項目であったため、別項目として分析した。

任意の体験したGW中の感情については、一般感情尺度において「肯定的感情」24.47 (4.62) 点、「否定的感情」13.43 (4.42) 点、「安静状態」19.51 (3.81) 点であった。

GW 好き嫌いでは、3.28 (0.69) 点であり、自尊感情は32.42 (6.87) 点であった。

協同作業認識尺度では、「協同効用」4.29 (0.50) 点、「個人志向」2.52 (0.64) 点、「互恵懸念」1.82 (0.68) 点であった。

表1. 調査項目の平均点

		N=474人	
		平均点	SD
GW ストレス	配慮過多による疲労	3.71	0.42
	非難攻撃	3.90	0.21
	不信劣等	3.53	0.55
	気掛かり	3.20	0.89
	合計	3.70	0.35
GWの時間がとても苦痛だと感じた		3.73	0.55
GW中の 感情	肯定的感情	24.47	4.62
	否定的感情	13.43	4.42
	安静状態	19.51	3.81
グループワーク好き嫌い		3.28	0.69
自尊感情		32.42	6.87
協同作業 認識	協同効用	4.29	0.50
	個人志向	2.52	0.64
	互恵懸念	1.82	0.68

2. 項目間の相関（表2）

体験したGWで感じた対人ストレス内容およびその時の感情と他の調査票や項目との関連性について分析した。

「GWの時間がとても苦痛だったと感じた」とGWストレス内容との相関は、「配慮過多による疲労」 $r=0.612$ ($P<0.01$)、「非難攻撃」 $r=0.373$ ($P<0.01$)、「不信劣等」 $r=0.613$ ($P<0.01$)、「気掛かり」 $r=0.428$ ($P<0.01$) であった。また、感情との相関は、「肯定的感情」 $r=0.282$ ($P<0.01$)、「否定的感情」 $r=-0.337$ ($P<0.01$)、「安静状態」 $r=0.113$ ($P<0.05$) であった。

GW好き嫌いとGWストレス内容には、有意な関連性はなく、感情との相関は、「肯定的感情」 $r=0.166$ ($P<0.001$)、「否定的感情」 $r=-0.008$ (n. s.)、「安静状態」 $r=0.132$ ($P<0.001$) であった。

自尊感情とGWストレス内容との相関は、「配慮過多による疲労」 $r=0.172$ ($P<0.01$)、「非難攻撃」 $r=0.183$ ($P<0.01$)、「不信劣等」 $r=0.275$ ($P<0.01$)、「気掛かり」 $r=0.323$ ($P<0.01$) であった。また、感情との相関は、「肯定的感情」 $r=0.199$ ($P<0.01$)、「否定的感情」 $r=-0.253$ (n. s.)、「安静状態」 $r=0.092$ ($P<0.05$) であった。

協同作業認識との関連性については、GWストレス内容と「協同効用」には有意な相関はなく感情とは、「肯定的感情」 $r=0.323$ ($P<0.01$)、「否定的感情」 $r=-0.095$ ($P<0.05$)、「安静状態」 $r=0.022$ (n. s.) であった。「個人志向」では「配慮過多による疲労」 $r=-0.241$ ($P<0.01$)、「非難攻撃」 $r=-0.191$ ($P<0.01$)、「不信劣等」 $r=-0.239$ ($P<0.01$)、「気掛かり」 $r=-0.194$ ($P<0.01$) であり、感情との相関は「肯定的感情」 $r=-0.275$ ($P<0.01$)、

「否定的感情」 $r=-0.128$ ($P<0.01$)、「安静状態」 $r=0.010$ (n. s.) であった。「互惠懸念」では「配慮過多による疲労」 $r=0.112$ ($P<0.05$)、「非難攻撃」 $r=-0.043$ (n. s.)、「不信劣等」 $r=-0.161$ ($P<0.01$)、「気掛かり」 $r=-0.054$ (n. s.) であり、感情との相関は「肯定的感情」 $r=-0.122$ ($P<0.01$)、「否定的感情」 $r=-0.142$ ($P<0.01$)、「安静状態」 $r=0.031$ (n. s.) であった。

GW ストレス内容と感情との相関では、「肯定的感情」とは、「配慮過多による疲労」 $r=0.231$ ($P<0.01$)、「非難攻撃」 $r=0.146$ ($P<0.01$)、「不信劣等」 $r=0.340$ ($P<0.01$)、「気掛かり」 $r=0.180$ ($P<0.01$) であった。「否定的感情」では、「配慮過多による疲労」 $r=-0.308$ ($P<0.01$)、「非難攻撃」 $r=-0.216$ ($P<0.01$)、「不信劣等」 $r=-0.347$ ($P<0.01$)、「気掛かり」 $r=-0.274$ ($P<0.01$) であった。「安静状態」では、「配慮過多による疲労」 $r=0.099$ ($P<0.05$)、「非難攻撃」 $r=0.056$ (n. s.)、「不信劣等」 $r=0.194$ ($P<0.01$)、「気掛かり」 $r=0.067$ (n. s.) であった。

表2. GWストレス内容と調査項目との相関

		N=474人					
		GWの時間が とても苦痛	GW好き嫌い	自尊感情	協同作業認識		
					協同効用	個人志向	互惠懸念
GW ストレス	配慮過多による疲労	0.612 **	0.069	0.172 **	0.023	-0.240 **	-0.112 *
	非難攻撃	0.373 **	0.052	0.183 **	0.019	-0.191 **	-0.043
	不信劣等	0.613 **	0.037	0.275 **	0.031	-0.239 **	-0.161 **
	気掛かり	0.428 **	0.037	0.323 **	-0.024	-0.194 **	-0.054
GW中の 感情	肯定的感情	0.282 **	0.166 **	0.199 **	0.323 **	-0.275 **	-0.122 **
	否定的感情	-0.337 **	-0.008	-0.253 **	-0.095 *	0.128 **	0.142 **
	安静状態	0.113 *	0.132 **	0.092 *	0.022	0.010	0.031

		GW中の感情		
		肯定的感情	否定的感情	安静状態
GW ストレス	配慮過多による疲労	0.231 **	-0.308 **	0.099 *
	非難攻撃	0.146 **	-0.216 **	0.056
	不信劣等	0.340 **	-0.347 **	0.194 **
	気掛かり	0.180 **	-0.274 **	0.067

表中の数字はPearson の相関係数

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

3. 集団活動志向性尺度について

独自に作成した 22 項目の平均と SD、および他の項目との相関について、表 3、表 4 に示した。

表3. 集団活動志向性尺度の平均点

N=474人

	平均値	SD
1. グループで人と一緒に活動することが好きである。	4.03	0.92
2. グループのために自分の力（才能や技能）を使うのは楽しい。	4.08	0.78
3. 独りでやるよりもグループの方が良い成果を得られる。	4.22	0.73
4. 独りでやるよりもグループの方がやり甲斐を感じられる。	4.15	0.80
5. 独りでやるよりもグループの方が充実感を感じられる。	4.20	0.78
6. グループ活動では個人の能力を超えた成果を出せる。	4.05	0.87
7. グループ活動で他の人の意見を聞くことは自分にとって有益である。	4.58	0.56
8. どちらかといえば独りでやるよりもグループで作業をしたいと思う。	3.88	0.99
9. グループの方が自分の力を出すことができる。	3.51	0.95
10. グループでの活動でよい成果を出す自信がある。	3.45	0.93
11. グループ学習は知識の修得に効果的である。	4.35	0.69
12. グループ学習は様々な分野での技術修得に効果的である。	4.38	0.64
13. グループでの作業は余計な時間がかかる。	2.75	0.94
14. 優秀な人たちはグループ学習によってよい成績を得ることができる。	3.95	0.85
15. 優秀でない人たちはグループ学習によってよい成績を得ることができる。	3.78	0.90
16. グループ活動では他のメンバーより自分の負担が増えると感じる。	2.59	0.91
17. グループ活動では他のメンバーより自分が我慢をすることが多くなる。	2.49	0.86
18. グループでの活動は疲れる。	2.73	1.04
19. グループでの活動は気が重いと感じる。	2.40	0.97
20. グループ内で人に指図されて仕事はしたくない。	2.24	1.03
21. グループ活動時に人に指示したり、意見したりすることは苦手である。	3.04	1.13
22. グループで活動すると手抜きをしたくなる。	2.15	0.91

表4. 集団活動志向性尺度と調査項目の相関

N=474人

	対人ストレス 合計	GWの時間が とても苦痛	肯定的感情	否定的感情	安静状態	GW 好き嫌い	自尊感情
志向性1	0.167 **	0.270 **	0.486 **	-0.143 **	0.123 **	0.119 **	0.130 **
志向性2	0.068	0.160 **	0.415 **	-0.060	0.096 *	0.118 *	0.141 **
志向性3	0.142 **	0.212 **	0.355 **	-0.107 *	0.122 **	0.132 **	0.087
志向性4	0.159 **	0.237 **	0.394 **	-0.081	0.092 *	0.106 *	0.089
志向性5	0.160 **	0.251 **	0.414 **	-0.099 *	0.094 *	0.120 **	0.115 *
志向性6	0.081	0.145 **	0.346 **	-0.114 *	0.143 **	0.129 **	0.113 *
志向性7	0.046	0.120 **	0.286 **	-0.033	0.035	0.130 **	0.067
志向性8	0.152 **	0.262 **	0.358 **	-0.034	0.101 *	0.082	0.016
志向性9	0.146 **	0.255 **	0.351 **	-0.059	0.177 **	0.112 *	0.125 **
志向性10	0.149 **	0.264 **	0.386 **	-0.122 **	0.158 **	0.069	0.263 **
志向性11	0.115 *	0.109 *	0.272 **	-0.062	0.118 *	0.113 *	0.137 **
志向性12	0.070	0.115 *	0.276 **	-0.097 *	0.024	0.107 *	0.125 **
志向性13	-0.063	-0.075	-0.137 **	0.064	0.034	-0.056	0.004
志向性14	0.031	0.010	0.154 **	-0.071	0.112 *	0.074	0.061
志向性15	0.087	0.059	0.211 **	-0.105 *	0.116 *	0.074	0.041
志向性16	-0.154 **	-0.130 **	-0.117 *	0.043	0.029	-0.051	0.051
志向性17	-0.185 **	-0.091 *	-0.194 **	0.151 **	-0.004	-0.065	-0.051
志向性18	-0.234 **	-0.291 **	-0.378 **	0.158 **	-0.079	-0.112 *	-0.076
志向性19	-0.260 **	-0.337 **	-0.392 **	0.250 **	-0.017	-0.144 **	-0.124 **
志向性20	-0.175 **	-0.145 **	-0.032	0.024	0.083	-0.054	-0.049
志向性21	-0.117 *	-0.155 **	-0.272 **	0.134 **	-0.079	-0.043	-0.226 **
志向性22	-0.074	-0.116 *	-0.091 *	0.065	0.052	-0.051	-0.068

表中の数字はPearson の相関係数

** 相関係数は 1% 水準で有意 (両側)

* 相関係数は 5% 水準で有意 (両側)

考察

調査対象とした、看護大学生においては、GWは比較的好きな学生が多く、回答が偏ったこともありGWの好き嫌いと対人ストレスの経験の多さとは有意な関連性が認められなかった。また、学年や調査時期を分けていないため、今後は分類することで詳細な分析が必要である。

任意のGWの経験におけるGW対人ストレス内容については、合計が3.70点とそれほどストレスを感じていなかった。また、そのような対人ストレスが少ないGW経験では、肯定的な感情を多く感じていた。できるだけメンバーと当たり障りのない対応をすることで、対人ストレスを回避していたのではないかと考えられる。

対人ストレスによってGWの時間がとても苦痛だと感じている学生は、GW内での対人ストレスも多く経験しており、より否定的な感情を感じていた。また、協同作業認識尺度における個人志向が高い学生は、GWにおける対人ストレスをより多く経験しており、集団よりも個人での活動を好む学生は、GW内での対人ストレスを感じやすいことが示唆される。

今回、集団活動志向性を評価する尺度についても検討した。肯定的感情との有意な関連性が多く認められており、集団活動に対して志向性の高い学生はGWの実施において肯定的な感情を抱いていた。

GWなどの集団を活用したアクティブラーニングの効果を左右するのは、集団活動への学生の積極的で主体的な参加と、活動内での学生同士の生産的なやり取りである。活動においては、感情は重要であり、活動内でより肯定的な感情によって積極的で主体的な参加が可能になるのではないかと推測される。一つひとつの肯定的な感情を抱くような活動の積み重ねによって、集団活動の志向性がさらに高まると考える。しかし、経験する集団活動が苦痛だと感じる事が多くなると、集団活動志向性は低くなり、集団よりも個人での活動を好むようになる可能性も考えられるため、今後は詳細な分析が必要である。

今回、一部の結果を分析したのみであり、今後は詳細な分析を行い、アクティブラーニングの効果を高めるような活動の仕組みづくりを検討したいと考えている。

文献

- 1) 橋本剛 (2005). 対人ストレス尺度の開発, 人文論集, 静岡大学人文学部人文学科研究報告, 56, 45-71.
- 2) 橋本剛 (1997). 大学生における対人ストレスイベント分類の試み, 社会心理学研究, 13 (1), 64-75.
- 3) 久田満, 丹羽郁夫 (1987). 大学生の生活ストレス測定に関する研究 : 大学生用生活体験尺度の作成, 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要, 社会学心理学教育学, 27, 45-55